
お菓子はアマイモノ

回覧板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お菓子はアマイモノ

【Nコード】

N8025R

【作者名】

回覧板

【あらすじ】

琴吹高校に入学することになった宮澤志乃、下見にいたその日近衛大吾郎と出会う。そして近衛の勧めで滅多に開かない秘密の名店『CandyStore』に招待される。***【CandyStore】参加作品です。

アイスクリーム

春。まだ寒さが残りながらも暖かくなっていく毎日。明日にはなだらかな山の上にある県下一の琴吹高校で入学式があり、満開の桜のトンネルをくぐって学校への初めての通学を控えている高校生はおよそ二百人。そしてその麓にある他の桜とは違う御神木のような桜がある公園のブランコに座り、ぶらりぶらりと体を揺らしている宮澤志乃もその一人だ。

下見のためにここに来た宮澤だが、駅を二つ分離れた場所であるこの辺りのことがあまり分からず、でも直ぐに帰るのも気が引けてこの場所で無為な時間を過ごしている。

「あんた、琴吹高校に入学する人か」

快活な声は公園の入り口から響いた。

宮澤には初対面の男だ。背は一八〇はあるだろうか、ただ背の割には細く巨体というよりものっぽの方が合っている。

「そうだけど」

「はあ、良かった。間違ってたらしょうかと思った。俺も明日から通うんだ」

同級生か、これで。宮澤は内心そんなことを考えながら、ブランコから降りて男の方に向かう。

宮澤の頭が肩にギリギリ届かないので、自然と上目遣いで宮澤は男を見る。その顔がにかつと子供のように笑った。

「俺は近衛大吾郎。よろしくな」

「私は宮澤志乃よ。よろしく」

「入学式の日にち間違ったのか」

「だったら私は制服着てるでしょうね。下見よ、し、た、み」
「そっか」

近衛は感心するように頷く。

「家まで送ってやろうか、迷子だろ」

「眼科に行った方がいいよ、近衛君。私の家二つ隣の町にあるけど」
「うげ、そりや無理だ」

宮澤は苦笑する。近衛の態度を見ているとなんだか春の日差しのように温かい気持ちになるからだ。

見たところこの辺りの人みたいだし、町を案内してもらおうかなと宮澤は考える。そうすれば仲良くなれるし町も分かって一石二鳥だ。同じ学校から琴吹高校に入学したのは宮澤だけ、つまり入学式から友達を作らないと後々面白くない。今の内に男子とはいえ友達を作っておいた方が無難だろう。

「变わりに町を案内してやるよ。隠れた穴場とか知ってるからさ」
「この辺りを案内してくれない」

二人は同時に言って、その意味を考えて呆然とし、最後に揃ってクスツと笑う。そして同時に、気が合いそうな奴、と思うのだった。
「決まりだな。後ろ乗れよ」

「うっん、歩く。明日からは歩かないとダメだしね」
「そうか」

近衛は強要はせず、自転車から降りて押して歩く体勢にはいる。
二人は並んで桜の御神木がある公園を出ていくのだった。

「つで、何か確認しときたい店とかあるか」

近衛は歩きながら聞く。宮澤は少し考えてから、どこでもいいと結論付けた。

「ないよ。近衛君の采配に任せる」

「重役任されたな」

「私の好感度を上げるために頑張って」

「他人事かよ」

ともすれば付き合っていると疑われかねないくらい親密な会話。

もうお互いにそれだけのことをしても許されると理解しているからだ。

自転車が無造作に置かれている場所に自転車を置いてから三十分、駅周辺を適当にぶらぶらと回っていた二人は恋人同士に見えなくもない。

「ちょっと疲れたかな。どこかに入らない」

「ん。じゃあ……開いてるか分からないけど、一番美味しいお菓子屋さんでも行くか」

「今お昼時よ。開いてるでしょ」

「あそこはそういうのはあんまり関係ないんだ。とりあえず行ってみるか」

「そうだね、案内は任せたよ」

「任された」

近衛の後を追おうとした宮澤、ふと前をいく姿の横に丁度良い悪戯道具がぶら下がっているのが見えた。

そのの先端に自分の手を重ねる。二人の手が繋がった。

いきなりのことに驚く近衛だが、してやった顔をしている宮澤を見ると苦笑して何も言わない。

悪い気はしない、そういうことを考えているのかもしれない。

二三分歩いた二人は目的地に到着した。

しかしその前で突然と立つことしか出来ない。

白い外装にバラの模様が描かれた看板。そこに書かれている文字、Candy Store、これは店の名前だろうか。いや、今はそれどころじゃない。

「閉まってるね」

「やっぱりか。ここ最近が開いてないからそろそろだと思ったんだけどな」

ドアにかけられたCLOSEDの文字が現実を告げていた。

顔を見合わせる。お互いが困ったと主張して、これから適当に違

う店にでも行こうかと言う時、おもむろに店のドアが開いて中から背の高い好青年が姿を現した。

「お客さんですか。運がいいですね」

好青年はにこりと笑いながら言って、CLOSEDと書かれた看板をひっくり返しOPENにする。

看板には店の名前が書かれた看板と同様にバラが描かれている。

「ただいま開店です、寄っていきませんか」

手招き。二人はまたまた顔を見合わせて、分けてもらったかのように笑顔を咲かせる。

「もちろん」

重なつた明るい元気な声に好青年はやっぱり笑顔で応えて店の中に引き返し、二人も続いて店に入った。

中もやはり白が目立つ清楚なイメージだった。ただ、ものが何もない。お菓子どころかショーケースすら置かれていない店内は天国という聖域を思わせる。

店内奥の机を陣取る。メニューは置いておらず、代わりに大きめの白紙とシャーペンがあった。

「出来たらお呼びください」

「どういうことですか」

「ここじゃ、メニューは作るんだよ」

「書くってこと」

宮澤は手で何かを書くジョスチャーをする。

「そゆこと。はい」

近衛はいつの間に書いたのか、汚い絵が描かれている紙を青年に手渡した。

「いつものように汚い絵ですね」

「うるせー」

「では少々おまちください」

青年は紙を丁寧に折り曲げてポケットにしまい、奥の部屋に引っ込んだ。

店に人が入ってくる気配はない、閑散とした室内がもしかしたら閉店していると思わせるのかな、と少し失礼なことを考えた宮澤はシャーペンを手にもまだ白紙の紙と向き合った。

窓の向こうの人通りは並み、多いというわけでもなく少なくともない。

「お待たせしました」

白いエプロンに着替えた青年が両手にそれぞれお皿を持って帰ってきた。一つにはさっき近衛が書いたものと類似したケーキが、もう一つには真っ白い雪のようなアイスクリームが乗っけられている。

「これは」

「あ、それ」

不思議そうにアイスクリームを指した宮澤の指の先にあるアイスクリームを見て、近衛は声を漏らした。

「これはご常連が作ったアイスクリームです。名前は『ホーリーナイト聖なる夜』でしたか、良いセンスです」

「嫌みか」

「もちろん」

にこりと笑った青年に近衛は悔しそうに顔を真っ赤にする。

宮澤はアイスクリームをスプーンで掬い取り口に運ぶ。途端に口の中に甘いバニラの風味が広がってきた。いや、これはバニラの甘味だけじゃないような。

「『恋は蜜の味』と書かれていたので、隠し味に蜂蜜を使っています」

「……いつそ殺してくれ」

「おや、まだ蜜の味がする恋はしていないでしょう、もう少し頑張ринаさい」

「このアイスクリーム、本当に美味しいですね」

「礼なら私ではなく彼に言ってくださいね」

と言って近衛を指差す子供のような青年に思わず宮澤は頬を緩ませた。

しばらく三人で談笑しながら過ごしていたが、時間というのは経つのが早い。アイスクリームが溶ける前に食べきると空いた時間はより長く感じられる。

「人はいませんね」

「そりゃあ、ここは隠れた名店ですから」

楽しそうに返された。このまま追求したら何か秘密の一つや二つ簡単に出てくるような気がしたが、なんだかそれはしてはいけないことに感じた宮澤はそうですかと濁して立ち上がった。

「私もういきます」

「なんだよ、たまにしか開いてないんだぞ」

「街も見れたし、休憩も出来た。そろそろ家に帰らないとね」

「そうか。じゃあ俺も行く。駅まで送ってやるよ」

「いいよ、ここからならいけるし」

「遠慮すんなって。じゃ、ごちそうさま」

「はい。またのご来店をお待ちしています」

カランツ。

はたと気付くと宮澤と近衛は二人揃って『Candy Store』の入口に立っていた。

「あ、あれ……」

振り向くとCLOSEDの文字が書かれた看板がある。

中を見ても誰かがいる気配もない。まるで最初から開いていなかったかのような雰囲気だ。

「会計……してない」

「俺も何度か来たけど、気付いたらこうなるんだ。ま、次来たときにでも聞いてみたら」

まるで知っているように言う近衛。

宮澤はちよつと意地になって先を歩いた。

けれど確かなことはある。

宮澤はさっきまでお菓子を食べていたんだ。

それはまだ口に広がるアイスクリームの味が証明している。

アイスクリームは溶けてなくなったが、食べたという記憶は忘れない。宮澤はそう決めて帰路を歩く。

今日は楽しい一日だったと、心から思いながら。

キャンディ

「宮澤」

放課後の教室今から帰ろうかと思っていた宮澤志乃を、よく響く爽やかな声と呼んだ。声の主は近衛大吾郎だ。

宮澤は教科書類を鞆に入れながら声だけで返す。

「何」

「お菓子食いにいこうぜ」

「この三週間で五度目だよ。女の子の体重を何だと思ってるのよ」
パタンと復習用の教科書を入れ終えた鞆を閉じ、宮澤はわざとらしく肩を落として見せた。

「行かないのか」

「行くに決まってるよ」

「そこないとね」

近衛が笑い、つられて宮澤も笑う。

そんな二人を遠巻きに同級生が見ていた。そしてその中の一人が、
つついもらしてしまう。

「あいつら何で付き合ってないんだよ」

「今日はどこにいくの」

「まあまずはいつも通りあそこかな」

二人は手を繋いで駅前の賑わう通りをかき分けて進む。
通りに人が少なくなつて、余裕で歩けるくらいになった時、ようやく目的地に到着した。

白い外装にバラの装飾が施された看板、Candy Store。
滅多に開くことがないお店で、今日も変わらずCLOSEDという

看板もかけられている。

ということは今日もお休みのようだ。

しかし、二人は何となく引きつけられるように店に近づき、窓から店内を覗き込んだ。本当に、何の気なしに覗いただけだった。

そこにいたのは竜だった。食べるようなサイズじゃない、むしろ食べられるようなサイズだ。前はこんなもの無かった。

「またいらしたんですね」

そうしてその竜に魅入っていると、不意に後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこにいたのはあの青年だった。いつの間にかCLOSEDの看板はOPENに変えられている。

つまり久しぶりに、日にして三週間ぶりに、CandyStoreが開業したようだ。

宮澤と近衛の顔に笑顔が表れる。

青年はニコツと笑い、手で店内を勧めながら、

「よっていきますか」

「もちろん」

元気よく答えて店内に入る。

店内はがらりと変わっていた。

まず、机は巨大な円卓状になっていて、その上をいくつかのお菓子が並んでいた。

その中に窓からたまたま見えた竜がいる。

いや、竜があった。

「作り物」

「そつみただな」

宮澤はその竜に触れる。僅かに温もりが肌を伝う。

「飴細工ですよ。常連さんが描かれた話を頼りに作りました」

「文でも出来るんですか」

「想いがこもっているなら、形は関係ありません。ここは想いを甘いお菓子にする、CandyStoreですからね」

自慢げに青年は言う。

宮澤が見渡す限り、そこには二十四個の作品がずらりと並んでいた。どれもこれも個性が溢れていて、見ていて楽しくなる。

その中で宮澤はバイクを象られたキャンディを手にとった。お皿はノートのようになっていて、妙に印象に残るキャンディだ。

近衛が気に入ったのはやはり竜。しかし気に入ったのは、この竜がどこか優しげで、そして見ていると心が癒されるからだ。

「今日は何をお食べになりますか？」

「俺は作ってきた」

近衛はポケットに手を入れ、綺麗に折り畳まれた紙を取り出した。青年はそれを受け取ると、クスツと笑ってから奥の部屋に行ってしまった。することが無くなった宮澤と近衛は席に座って待つことにする。

やっぱりすることがないので、店内を見渡すと、気付いた。二十四の作品の近くに同じ数だけの人が座っていた。もちろん、円卓で隣の席に座っている人も見えた。さっきまではいなかったのに。

しかし不思議にも宮澤は不思議に思わなかった。当然とも思わず、ただ受け入れてしまったのだ。

よく見るとみんな楽しげに何かを白い紙に書き起こしているみたいで、何かが描かれる度にお菓子が形を変えている。ほんの少しだが確かにかわっているのが分かる。

「なんだか不思議だね」

「そうだな。俺も最初は思ったよ」

ふうんと相づちを打った宮澤は、手に持ったバイクの型に入れたかのようなキャンディを口に含む。甘い中にちよと酸っぱい味を感じさせる、不思議な味。

口いっぱいに広がった味にうっとりとしながら他愛のない世間話を二人はしていた。

そこに一種類で二つのお菓子が後ろから差し出される。見るとにこにこ顔のあの青年がいた。

「お待ちどうさまです。それと、皆さんが作っている物はつまみ食いで大丈夫ですよ。皆さんもその方が喜びますしね。」

「そうなんですか」

「はい。お菓子は誰かに食べられて初めてお菓子ですからね」

にこにこしながら言われると、なんだかそうとしか考えられな
いから不思議だ。

宮澤は改めて出されたお菓子を見た。白い箱のようなお菓子だ。

「へへ、俺からのプレゼント。開けてみ」

近衛が少し紅くなりながら言うので興味津々で箱のお菓子を開いてみると、中から指がはめられるくらいに小さな銀のリングが置いてあった。

いや、よく見ると違う。透明で、周りの色を吸収して銀に見えているのだ。

「何、これ」

「飴細工の指輪」

少し語調を強めていく。

「なあ、宮澤。俺と付き合ってくんね」

それから出されたのは何気ない言葉。

今でも同じくらいの関係で、今日からはさらに甘酸っぱい関係になろうと、そういうこと。

返事は早い方がいい。だけど早すぎると逆に悪い。

「そっちのも指輪なの」

「そうだけど」

「なら出して。はめっこしよう」

一瞬驚いたように目を見開き、次は意味を理解して目をそのまま真っ赤になる近衛。

しかし、嬉しいことに変わりはない。自分の前に置かれた飴細工の指輪を取り出し、宮澤の手をもう片方の手で優しく持ち上げる。

「じ、じゃあ人差し指でいいか」

完全に緊張して呂律が回らない。

宮澤は少し俯いた、頷いたようにも見える。

「バカ」

聞こえたのは照れ隠しのナイフ。顔を真っ赤にして、少し目を潤ませた宮澤はいつもより高い声で、まくし立てるように言うのだ。

「溶けるか食べるかするんだから、薬指にすればいいじゃないの」

「い、い、いいのか」

「私も近衛君の薬指にはめてあげるから」

「え」

見開いている目をさらに開いて、今度は嬉しそうにニカツと笑う。

「じゃ、はめるぞ」

スルツと大分余裕をもって宮澤の薬指に指輪がはまった。掲げて見る、とても綺麗だ。

その手で近衛の手を掬い取り、薬指にもう一つの指輪をはめる。

こちらにもスルツとはまった。

「これからよろしくね、近衛君」

「こっちこそよろしく、宮澤」

向かい合ってクスツと笑う。

「ふふ、素敵でしたよ」

最後にそんな声が聞こえ、カランとCLOSEDの看板が音をたてて二人はCandyStoreの前に立っていた。

「またお金払い忘れちゃったね」

「だな。また次回に聞いてみよう」

「うん」

手と手をつなぎ合わせて二人は歩く。

お互いの指にはまった誓いの輪と一緒に。

クッキー（前書き）

今回は小説としては疑いのような駄作です。

しかし、楽しんでくださいね♪

クッキー

この前CandyStoreへ行ってから早くも三週間が経った。新入生達は慣れ始めて、学業以外の事にも現を抜かし始める時期だ。具体的には部活へ異常な情熱を注いだり、通学路で遊んでみたり、やっぱり恋愛を試みたり。

そうなってくると場所に華を咲かせる美男美女という存在はかなり注目を集めたりするのだ。

「おい」

強いけど優しい声が響く。

「ん」

短いけど明るい声が返る。

この学校で一番注目を集めている二人の声だ。

優しい声は近衛大吾郎のもの。女子の中で密かにはやっている彼氏にしたいランキングは堂々の一位に納まる、いわゆる美男子だ。

対して明るい声は宮澤志乃のもの。素っ気なく少し冷たい性格でありながら、甘いお菓子が大好きというギャップは周りの男子を惹きつけ、さらに美女足りうる容姿も兼ねた理想の女子だったりするのだ。

そんな二人は現在付き合って丁度三週目だ。

「柔道は」

「先生が体調悪いから自主参加だつて。だから久しぶりに志乃とお菓子食いに行こうと思ってさ」

近衛は柔道部期待のホープで、既にレギュラー入りも確定している。

「ふうん」

特に興味もなさそうな声が間を取り持ち、鞆に荷物を詰めた宮澤はその鞆を近衛に押し付ける。

「私を呼ぶときは宮澤か志乃様って言ったよ」

「志乃様」

「愚民と言つよ」

「ごめん、宮澤」

「それで良いの」 近衛が鞆を受け取ったのを確認して背を向ける。
黄色のリボンで結ばれたポニーテールが揺れる。

「怒ってる」

「何で」

「えっと、昨日女子と一緒にご飯食べに行ったから」

「分かつてるなら良い」

「良くない」

そっぽ向いた宮澤を近衛は後ろから抱きしめる。

ビクツと震え、手で明確に拒絶してきたけれど離さない。

「友達付き合いだし、こんなことで泣かれたくないから」

「泣いてない」

強引に振り払う。近衛が本気なら払えないが無理に抑えるほど彼は強気にはなれない。

振り払った後、宮澤はふうと近衛に聞こえるように息を吐き、それからクルツと回って少し力を入れた右ストレートを近衛の鍛えられた腹筋に叩き込む。ぐふつと近衛はよろける。

「ケーキ」

振り抜いた拳を開き求めるように差し出す。近衛はやれやれと思いつつも嫉妬してくれる宮澤の手を取った。

「分かりましたよお姫様」

「うん、よろしい」

ギュツとお互いに握り合う。

繋がった想いを間違えないように。

「お」

近衛は小さく驚きの声を上げた。目の前には白い外装の店、薔薇の装飾がされた看板にはCandy Storeの文字がある。

今日は開店しているようだ。

「どうする」

分かりきった返事を求めて言う。

「入るに決まってるよ」

分かりきった返事が返ってきた。

二人は手を繋いだまま店の中に入る。

店内はまたがらりと変わっていて、カウンター席になっついた。けれど、相変わらず色は白で統一されて、穢れを寄せ付けないようだった。

カウンターの向こうにはいつもの青年が二人を認めて手招きしていて、二人は逆らわずに近付いていった。

「ようこそ。お久しぶりですね」

「いつも閉まってますからね」

ごもつとも、と青年は笑い、二人の前にオレンジジュースを入れた。

「今はそれしか置いてないので、それで我慢してください」

「オレンジで何か作っているんですか」

「そういう訳ではないですが、そうですね…… オレンジジュース以外出したくない気分なんです」

青年はそう言ってポケットから丁寧に置まれた紙を取り出した。

チラツ中に赤い何かの絵が見えた。

「なんですか、それ」

「あ、俺も気になった」

「見てみますか」

二人の注文に笑顔で対応する青年は、言葉に反して紙をポケットにしまった。そしてごそごそと二三回手を動かしてから、では出し

まず、と前置きする。

ゆつくりと引き抜かれる手には真っ黒い棒が握られている。到底ポケットには入らないはずの大きさ、そして赤くない。

「あれ、赤くない」

「さつきは赤かったよな」

「うん」

二人は目の前に出された黒い棒を見る。どこから見ても真っ黒だ。
「ふふ。まだ未完成ですよ」

青年はマジックをするように手を出す。何かと思って注視すると、手にはトンカチが握られていた。

「これを、こうします」

パキツと氷を砕くような音が響いた。

トンカチを脇に置いて、黒い棒の一端を握る青年。

ずっとという音が聞こえた気がした。

「うわぁ」

「すっげえ」

青年の手に納められていたのは刀を模したクッキーだった。長さまで忠実に再現されたその刀身は熟れたイチゴのように紅い。

刀身から微かに香る甘酸っぱい香りが二人の鼻孔を攪り、食欲を沸き立たせる。

「やっぱり、莓かな」

「はい。実は私莓が大好きです」

「俺も」

美味そうなお菓子をじゅるりと涎を拭い、食べても良いのかと近衛は目で訴える。

青年はやれやれとした風に笑い、ポケットから皿状のクッキーに甘い果物と生クリームを詰めたケーキを取り出した。

「美味しそう……」

「仕上げがまだです」

青年は笑って先ほどの刀のクッキーをケーキの上に刃を下に持つ

てくる。

ストン。

驚いたことに同じクッキーでありながら刀のクッキーは意図も簡単に皿状のケーキを寸断した。

引き抜くとべったりと生クリームが赤い刃に付着し、果物も巻き込んでいる。

青年はそれを後二回行ってから、生クリームが付いた赤いクッキーを真つ二つにして、宮澤と近衛の二人に差し出した。

「召し上がれ」

宮澤は受け取った折れた刀のクッキーをまじまじと見る。隣ではすでにもぐもぐと近衛が忙しく美味しそうに食べている。

ごくりと甘い香りに刺激されて出てきた唾を飲み込み、生クリームがべったりと付いた赤いクッキーを食べる。

「美味しい」

「きつと制作者も喜ばれていますよ」

青年は先ほど切ったケーキを一つずつ二人の前に差し出す。こちらも美味しそうだ。

食べてみる。やはり美味しい。

「ねえ、近衛君」

「なんだよ、宮澤」

「別に女子とどっか行ったから怒ってたんじゃない」
どこか拗ねたように宮澤は続ける。

「私がそんなことで怒ってって思われたことに……、怒ってるんだから」

「悪かった」

「ううん、許さない」

ちよつとだけ頬を膨らませた宮澤は、食べ残った赤いクッキーを近衛の口に突っ込んでから席を立った。

「ごちそうさま」

「はい。またいらしてくださいね。歓迎します」

「宮澤待つてよ」

さつさと出て行ってしまった宮澤を追って近衛も出て行く。

一人カウンターに残った青年はケーキと皿を片付け、そしてチラッと我々を見てから、ニコツと笑いクルツと指を回転させる。

カラン。

乾いた音はCandy Storeの閉店を示すCLOSEDの看板がかけられた音だった。

クッキー（後書き）

前書きの意味は分かりましたか？

プリン（前書き）

今回はやりすぎた（汗

一種の感想みたいな気が……気のせいですね、わかります。

それでは、楽しんでいただければ幸いです♪

プリン

「宮澤さん、ちょっといい？」

放課後、荷物を鞆に片付けていた宮澤に三人の女子が集まってきた。

「ん」

短く応答し、鞆を閉じる。

近衛は今日は柔道がある日なので、すでに教室にはいない。

加えて今教室には数えるほどの生徒しかおらず、宮澤に目を向けているのは話しかけた三人だけだ。

鞆から手を離れた宮澤は三人に正面から対峙する。

「何」

「近衛君と付き合ってるんですって？」

「そうだけど。何」

「気に入らないわ」

心底嫌なものを見る眼で女子三人は宮澤を睨みつける。

そういうことか、と納得した宮澤は、その瞬間から女子三人へ向けていた意識を手放す。

「気に入らなくてもいい」

宮澤は突き放すように言って鞆を持つ。目の前に立たれることすらも嫌気がさす連中だ。

だが相手は三人というのを利用して道を塞いできた。対面を塞ぐのは先ほども三人の中で一番喋る女子だ。

「何」

宮澤は露骨に嫌気をアピールしながら、シッシと首で退くように合図する。

さすがに頭にきたのか、対面の女子は顔をイチゴのように真っ赤にしている。

「ねえ」

宮澤はたまらず声をかけた。

「何よ」

明らかな苛立ちを含んだ声が返ってくる。

「その顔の方が似合ってるよ。なんだかイチゴっぽくてさ」

これには流石に我慢の限界だったのか、三人の女子は宮澤に殴りかかる。

顔に迫るビンタを見切った宮澤だが、いかんせん運動などはしない質なので体がついてこない。

結果、景気のいい音が教室に響き、残っている少ない生徒の全員が宮澤の方を向く。

「あ、あ」

ビンタしてから気付いたのか、急にあわあわと慌て始めた三人は、教室の奇異なものを見る眼に耐えられなくなったのか、そそくさと教室を出て行った。

ひりひりと殴られた痕が痛い。ソツと頬に手を当ててから、鞆を肩にかけるようにして持った宮澤。

今日の帰りは一人で町内を探索するのに決めた。

駅前はそのなりの賑わいを見せており、相応に楽しい。

「でも一人で見てもつままないなあ」

宮澤は何もない方の手を泳がせながら歩いていく。

一通り回った後は、最後に確認の為にあの店に行くことにする。二ヶ月と一週間もありながらたった三回しか店を開いていない、たくさんの思い出が詰まった店、Candy Storeへ。

「このあたりに一人でくるのは初めてかも」
それがちよつと寂しい。

宮澤はハツとして雑念を振り払うようにブンブンと頭を振る。

「これだと私は近衛君がいないと駄目みたいじゃない」

声に出して確認してみると、やはりそうとしか思えない。

はぁと溜息を吐いては見たものの一向に収まろうとしない胸のモヤモヤを抱えて、ようやくCandy Storeに到着した。

相変わらず真っ白で、真っ白い薔薇の装飾が施された看板が印象的だ。

一目見ると絶対忘れないようなその外見には似合わず、誰一人としてその店に目を向けるものはいない。

「いらつしゃい」

不意にそんな声が聞こえた気がして、宮澤はCandy Storeを見る。

そこには青年が一人浮かび上がるように立っていた。

「いらつしゃいませ、寄つていきますか」

吸い込まれるように店内に入ると、強い果物の香りが鼻と喉を刺激してきた。

「すいません、今日は少し特殊なお客様を呼んでいるのです」

青年は申し訳なさそうに言つて、カウンター席を宮澤に勧める。

そこに、一人の枯れた老人も座っていた。

宮澤は老人と二つ席を空けて席に着いた。なんとなくこの老人は近くにいてもいいような人に感じられなかったからだ。

しかし甘い香り、宮澤は気にされない程度に顔を動かして果物を探す。

「捜し物はこれかな」

探しているのが分かったのか、老人の方から宮澤に声を掛けてきた。

差し出されていたのは真っ青に染まりに染まった見た事もない果実で、見るからに熟れすぎているのがわかる。

「これはなんという果物ですか」

「これかい。これはね、コッカという果物さ」

「……コツカ、聞いた事ありません」

「だろうねえ」

老人は気にした様子もなく言つてのけた。

「このコツカは熟れすぎたのだよ、だから私が摘み取つたのだ。そしてここへ持つてきた」

「これをこれからお菓子にするのです」

青年は老人に白い紙を一枚、宮澤の前にも一枚、それぞれ差し出す。

老人は枯れた手で筆を取り、しかし何も書けないでいた。何も思いつかないのだろう。

「そうだ。ねえお嬢さんや、私の代わつてこの果物でお菓子を作つてくれないかい。どうも私にはこれをどうするかを決める勇氣はないのだよ」

「それはいいですね。宮澤さん、あなたさえよければ」

「やってみます」

宮澤は老人から熟れた果物を受け取る。

香りが強く、口に入れなくても甘味が舌を撫でる。

強すぎるなあ、と宮澤は思った。

「……」

ぶつぶつと誰にも聞こえない声を出しながら、宮澤は白い紙に鉛筆をなぞらせる。

しかしその顔はとても楽しそうだ。

「できた」

「はい、お疲れ様です」

青年は宮澤の書いた絵をチラリと見てから、熟れた果物を取り上げ、二つをポケットにしまう。

それからごそごそとポケットの中身をかき混ぜてから、何かを掴むようにして引き抜く。

そこにあつたのは、真っ青なプリンだった。

「ほほう、これはまた……歪なものを作りなさつたのう」

老人は懐かしいものを見るようにブループリンを見て、興味深そうに指でつつく。

するとつついた部分はプリン本来の色を取り戻し、老人の指に青が移った。

青いのはカaramelだった。

「コツカの下は果たして何になるんだろうなあ。しかし、それらをコツカは覆い隠してしまう。それはきつと宿命というものか」

老人はプリンを一匙掬い、口に運ぶ。

「摘み取った果実の、何たる美味なことか……そろそろ刈り取る時期と思った私の考えは間違えではなかった」

「お爺さんはどこから来たんですか」

「遠い遠い世界からじゃよ」

老人は寂しそうに言う。

何か事情があるのだろう、宮澤はそれ以上老人について聞くことは出来なくなってしまった。

カラン。

店に誰かが入ってくる音がした。

そこにいたのは近衛と若い女性、いや、若い女性はまるで最初からそこにいたかのように錯覚する。

「やっぱりここにいたのか、宮澤」

「そっちの女性は」

誰なのかを聞く前に、女性は宮澤に微笑み、近衛に礼をしてから老人を手招きする。

「迎えにきましたよ」

「おお、待っていてくれたのか」

「きつとあなたのしたことは最後の足掻きだと思います。私はそんなあなたを導きたい」

「そうか、私は足掻けていたのか……」

老人は俯き、掠れた声を漏らす。

「さあ、行きましょう。長い間待っていた分、たっぷり一緒にいた

「いのです」

「ありがとう……」

老人は女性に近づき触れる。すると老人は若返り、二人はお似合いの姿となってから消えてしまった。

「ずっと待ってたんだって、あの人」

「そうなんだ」

宮澤はそんな二人に心の中で敬意を払う。

「じゃ、私達も行こう」

「え、俺来たばっか」

「行こう」

「一口」

「行こう」

「……エスコートは」

「任せたよ」

「分かったよ、お姫様」

「よろしい、私だけの王子様」

そんな応答を繰り返し、宮澤と近衛の二人も消えて行っ

た。今日は閉店ですかね」

「そうでしょうか」

空から声が聞こえ、CandyStoreの店は閉じられた。

みたらし団子（前書き）

……みんなが第7回投稿するときに……orz
多分誰も彼もが混乱する。

加えて誤字脱字それを加速！

どうか緩い気持ちで。

いらっしやいませ。

みたらし団子

いつものように授業があり、ようやく昼休みに入った。

「志い乃おちゃあん」

不自然なくらいに間延びした声が宮澤の耳を震わせた。

条件反射のように椅子を立った宮澤。その宮澤の席に後ろから抱きつく影が一つ。しかし、宮澤がいないので背もたれに布団干しされたようにうなだれ、胸あたりから座席で曲がってしまう。

その上に志乃は座った。

「志乃ちゃあん……重いよお」

「星野さんが抱きつくのが悪い」

立ち上がり下にいる星野と呼ぶ女子を除けてまた座る宮澤は、鞆から弁当箱を出して机に置く。

「待つてよお」

慌てて宮澤と対面する椅子に座り、コンビニの袋を宮澤の机に置く。

それから中にあるのをいそいそと取り出していく。ポテトチップス、じゃがりこ、そしてみたらし団子。

宮澤は眉を寄せる。

「それは昼ご飯じゃない」

「またまたあ、そうやって私を騙そうと思っても無駄だからねえ。昼に食べるものは昼ご飯でしょ」

ふふんと自信たっぷり胸を張る星野、どうやら本気で信じているようだ。

少しイタズラ心が刺激された宮澤は、何か嘘をついてみたくなつたので、頭を回転させて考える。

「ねえ、星野さん」

「なあに、志乃ちゃあん」

「みたらし団子は食用じゃないんだよね」

ポテトチップスを食べている手が止まった。僅かに震えている。

「あれって実は観賞用よね、確か」

摘んでいたポテトチップスは床に落ちて、空になった指先を囁んでいる。

「う、うひょれひよ」

星野の驚愕に対して宮澤は無言で答えた。それを肯定とも思っただのか、星野はみたらし団子の入った箱をジッと見つめる。

宮澤は静かに言う。

「まさか、食べてたの」

「え、いや、た、食べてないですよ」

苦し紛れにそう言う星野が可愛くて、宮澤はみたらし団子のカバを開けて、一本摘む。

二個付きが四本のもので、数が多いからという理由で好んで買っているようだが、実際は三個付き三本の方が多いというのは言うても無駄だった。

未だに混乱している星野の口に一個入れて残り自分で食べる。

「う、そ」

そうやって言うと、星野は口の中の団子をもぐもぐと食べて、いきなり立ち上がったかと思えば、そのまま逃げるように走る。

途中宮澤に会いに来た近衛にぶつかり、それを受けとめようとした近衛が抱きつくような格好になるが、すぐに立ちなおして教室から出て行った。

「また何かしたのか」

「ね、知ってるかな。みたらし団子って観賞用なんだよ」

「……馬鹿か」

「私じゃないよ」

やれやれという仕草を近衛する近衛は開けっ放しのポテトチップスを摘む。

「ね、近衛君」

「なんだ、宮澤」

「星野さんの抱き心地はどうだったかな」

「女子に触れて喜ばない男子は男子じゃない」

近衛は即答した。聞かれるのが分かっていたからだろうか。

「でも、宮澤の手の方が俺には何倍も良かった」

ニツと笑いかけてくる近衛を直視出来ない宮澤は、照れ隠しにみたらし団子を棒ごと近衛の口に押し込み、俯きながら弁当に手をつけ始めた。

耳を真つ赤にしているのは隠しきれずに。

「明日絶対みたらし団子買ってきてよお」

宮澤と近衛の後ろ姿にそう言うと、星野は反対方向に走っていつてしまった。駅とは反対側に家があるようなので当然のことだ。

けれど怒っているのもつかの間、彼女の周りにはものの一分でグループが出来ていて、星野は囲まれて楽しそうに笑っている。

「星野って人気あるよな」

「そうだね。気になるの」

「宮澤が仲良くする数少ない奴だからな」

「ま、星野さんが仲良くしてくれるからね」

宮澤は星野の周りの集団に目を向けてから目を細める。

「群れようとして集まってるんじゃないの、集まるから群れてるように見えるんだよ、星野さんはね。だから好き」

「言いたいことは分かる」

言って手を差し出す。

宮澤が差し出された手を取って、それから歩き始めた。

「あ、今日はあそこが開いてるんじゃないかな」

「そうかもな、行ってみるか」

二人は定番となった三週間に一回のあの店に行くことにする。

不思議な雰囲気を漂わせ、白い薔薇の看板を持ったCandy Storeへ。

二人は手を繋いで歩く。ただ、二人とも恥ずかしさで、手を繋いでいるという感触もままにならないまま歩いていたので、さほど時間を感じることもなくCandy Storeへ到着した。

そこにいたのは青年だった。

「今日は何かあったのでしょうか。いつもより少し遅い気がします」
笑って手招きされて、二人で近付き、そのまま導かれるままに店内へ。

そこには今までにないような不思議な空間が広がっていた。

「あれ……」

店内はいつものバーのようになっていて、いつもよりも物がなかった。

そして、いつも青年がいるはずの立ち位置に老齢な男が年齢を感じさせないような出で立ちで立っていた。

「いらつしやいませ。おや、これは私が言つてよかったのか」

「構いませんよ。勉強させてもらいます」

「上手に言うものだ」

男は笑って、コップを三つ用意して、それにオレンジジュースを注いで、三人にそれぞれ差し出した。

それから同時に白い紙を差し出した。

「今日は何を作るのでしょうかね」

青年は楽しそうに紙を近衛に勧めて、近衛は少し考えた後、すぐに何かを書き始めた。

それを見ていた宮澤もふと何かを書きたくなってきた、紙に何かを書き始める。

それぞれ書けたところで、青年にそれを渡した。

青年はそれを受け取ると、ポケットに入れて、ごそごそと何かを

丸めるように動かす。

それを取り出すと、それはみたらし団子だった。
すかさず老年のマスターが二人の前にオレンジジュースを差し出した。

「宮澤。あーん」

「あーん」

宮澤は差し出されたみたらし団子にかぶりつく。

もぐもぐと口が動いているのが可愛らしいので、近衛はつついほっぺをつついてしまう。

「む。食べてるときに悪戯しないの」

「ごめんごめん」

笑いながら謝ると、今度は宮澤の方から近衛にみたらし団子を差し出した。

「近衛くん、あーん」

「あーん」

「あーん」

近衛が口を開けたところでみたらし団子はバツク。そのまま宮澤の口の中に入ってしまった。

「おいしい」

「食べてるときに悪戯しないんじゃないのか」

「食べる前だもん」

そう言って残りの団子も食べてしまう宮澤。

青年はさりげなく空いたお皿を取り、握りしめて消す。

「仲のいいことだ」

「いつもこんなですよ」

今まで黙って二人のやりとりに耳を傾けていたマスターと青年は、楽しそうに二人を眺めて話す。

ハッと二人の存在に気付いた耳まで真っ赤になり、俯き加減に視線だけを合わせる。

「き、今日はもう帰ります」

「ごちそうさま」

手早く帰り支度をして店を出ようとする宮澤と近衛の二人に、マスターは凜と響く声で一方向的に喋った。

「男は度胸、女は度量だよ。頑張れよ若者達」

カラン。

二人の姿は消えていた。

残った青年とマスターはしばらく沈黙していた。

しかし、もう時間がきてしまったようだった。

「楽しませてもらった。また来てみたいものだ」

「いつでもおいでください。ここは誰の物語も受け入れるCandy Storeですから」

「そうさせてもらうよ」

それだけ言うと、マスターの姿も消えてしまった。

青年はいつの間にか手に現れた一冊の本を本棚に入れ、それから天井を見上げた。

今日はここまでにしよう。

そんな声が響いたか響かなかったか。

確かなことは一つ。

世界が閉じられた。

チョコレート（前書き）

まだまだ遅刻！

だけど、最終回はすでに決めてある！

では。また更新できたことに感謝。
いらっしやいませ。

チョコレート

今日は終業式。

一学期という一区切りを終えて初めて与えられる、夏休みという名の休息期間。

もちろん直前には一部学生の敵とも言える期末テストなるものがあり、みんながみんな夏休みをエンジョイできる訳ではないのだ。だがそんな中でもきつちりとしてくる者もいる。学年トップを当然のようにいく宮澤がその一人だ。

「で、補習があると」

「ごめん」

逆に今宮澤に頭を下げている近衛何かは学年下位グループだ。

ただし、近衛に限ってはテスト当日、気を確かに持つだけで精一杯の風邪を拗らせながら受けたのだから仕方がない。

でも補習は免除されない。

「分かった。許す」

「ごめんな」

「許さない」

「ありがと」

「許す。で、今日はどうするの」

本当ならいつものようにあの店に行く予定だったのだが、近衛は今日から補習が始まるのだ。

流石県下一の高校だけはある。

「今日は止めとくか」

「いや、私は行きたい。だから遅くなっても絶対来てね」

「ほんとに遅くなるぞ」

「知ってる」

宮澤は何でもないように言っただけを持って、立ち上がる。

近衛がすまなさそうに見ているので、その胸に額を当てて体重を

預ける。

「お、おい」

「絶対来てよ。約束だからね」

そういつて、くるつと反転した宮澤はゆっくりとした速さで教室から出て行つた。

取り残された近衛はしばらく身じろぎ一つせずにつつ立つたままでいたが、仕方なさそうにため息をつくと自分の荷物を鞆にまとめ教室をでる。

と、教室に入ろうとしていた教師と鉢合わせになってしまった。

「近衛、お前は補習だろう」

「今日はサボります」

「教師に向かつて堂々とサボり発言とは、お前は馬鹿か」

「馬鹿でいいです。サボれるなら」

教師はやれやれと肩を落とし、近衛に道を譲つた。

「明日は来い」

「あざっす」

「おいおい、そこは馬鹿っぽくするな」

「ありがとうございます」

教師の横を通り過ぎ走る、近衛の後ろ姿を眺めた教師は、

「廊下は走るな」

と、注意を投げかけてから教室に入る。

中には近衛と同じように補習を受けさせられる生徒が非難の目を向けていた。

「あいつにはおまえらの倍やらす。倍やりたいやつから出ていけ」
教師の言。

残念なことに誰一人勉強に一生懸命なやつはいなかった。
いたらこの場所にはいなかっただろう。

教師はつまらなさそうに補習を始めるのだった。

「宮澤！」

丁度校門のところで宮澤に追いついた近衛は少し息をきらしながら、歩いて並ぶ。

「来なかったらどうしようかと思った」

「こうなるって分かったたのかよ。おかげで俺は補修が増える」

「あの先生話は分かるけど厳しいもんね。どんまい」

ぽんと肩を置かれた手はそのまま滑り降りて、手に納まる。

その手を握り返し、誰のせいだよと苦笑いで言う近衛。

それから宮澤の手を引いて歩きだす。

「今日もやってるかな？」

「どうだろうな。三週間毎ってのは分かってきたけど」

二人が当然向かい、当然たどり着いたのは、不思議なお店 Candy Store だ。白い薔薇の装飾が施された、質素というより異様に白一色のお店。

いつものようにそこに青年が立っていた。

「また来てくれましたか」

青年はどこか嬉しそうに言って二人を招き、二人は逆らうことなく導かれる。

中は長いテーブルが一つ置かれていて、そうようにいくつかの椅子がおかれていた。

しかし誰も座っていない。

ただ、お菓子だけがポツンと存在感を放ちながら置かれているだけだ。

青年はごそごそとポケットを漁ると、ポケットから二つの丸いチョコレートを取り出した。

それからホワイトチョコレートのペンも。

「今回はチョコレートで作ろうかと思ひまして」

「なるほど」

「ここに何か書いたらいいんですか」

「はい、そうです」

自然に、楽しそうに青年がいう。

二人はしばらく書く作業に没頭し、ほとんど同時に書き終えた。

近衛のチヨコには白いハートが、宮澤のチヨコには「LOVE」と直線的な字体で書かれていた。

二人とも交換するようだった。

「はい、近衛君」

「じゃあこれ、はい。宮澤」

交換し、口に入れる。

途端に強烈な甘さが口の中に広がった。しかし嫌な強さじゃない。むしろ嬉しい強さだ。

「甘かったようですね」

青年は嬉しそうに言う。

「そのチヨコはある作者さんが考えた真実を映すお菓子です。書かれたことが本当なら甘さが、嘘なら苦さが出ます」

言われて、より一層恥ずかしさの増した二人は真っ赤になりながら背中を向け合う。

お互い恥ずかしい想いを書いて渡して、それが真実ということを書付けられているようなものなのだから。

青年はそんな二人を微笑ましく見つめる。

「本当に仲がよろしいんですね」

「……まあ、近衛君は優しいし」

「宮澤は……、あれ、俺に全然優しくくない」

宮澤は目をあちこちにさまよわせ、青年は苦笑する。

「照れ隠しですよ。ほら、さっき好きってことは分かったでしょう」
「分かってるけど、たまには優しく」

「知らない」

ぷいとよそを向く。

と、窓の外の景色がくしゃりと歪んだような気がした。

「今日はお別れですね」

青年は少しだけ寂しそうに言って、手をふった。

「また会いましょう」

カラン。

いつものように音が鳴り、二人の姿がパツと消える。

同時に、窓から見える景色は真っ黒なものに。

後少し、もう少し。

声が響く。

青年の後ろには、老若男女を問わず何人かの人が立っていた。

青年は手に持った本をその人達に渡す。

本は、また、めくられていく。

ケーキ（前書き）

終わります。

ちよっとしたオマケを後書きに乗せてあります。

いらっしやいませ。

ケーキ

電車に揺られて十分程度、宮沢は高校のある町にまで辿り着いた。今日は通学しに来た訳じゃない。今日はこの町で夏祭りが行われるのだ。

だから今日の宮沢の服は浴衣。自分で綺麗に着付けたもの。顔には薄く化粧がされている。

改札を出ると、そこには宮沢と同じように浴衣を着た近衛が立っていた。周りにはクラスメイトが集まっている。

宮沢に気がついた近衛はクラスメイトの輪から離れて、宮沢に近付いた。

「早かったな」

「電車が混みそうだから早めに来たの。近衛君は人気者だね」

嫌に毒が含まれた言葉に近衛は少したじろいだ。

「俺何か悪いことしたか」

「知らない」

つんとしながらくると一回転して見せる宮沢。

そこで近衛は、なんとなく分かった気がしたのだ。

「似合ってるぞ」

「それだけ」

じとつとした目が近衛に向けられる。

しばし迷い、頭の中で言っべき言葉を反芻し、それから最後に一

回口の中で言ってみてから、

「可愛いぞ。とっても綺麗だ」

「ありがと」

相変わらずつんとしているが、伸ばされた手だけは嘘はついていないようだ。

近衛はその手を捕まえ、離さない。

「お手を、お姫様」

「ありがと」

「どこに回る」

「近衛君に任せる」

「任された」

駅を離れて商店街へ。

すると、商店街に立ち並ぶ屋台の中に一際人を集めるところがあった。

その中心には、星野がいた。

「あ、志乃ちゃん、大吾郎くん」

「叫ばなくても聞こえる。何してるの？」

「射撃だよ。ふっ、私の後ろに立つなあ。……どおだったあ」

「隙だらけだ」

星野が宮澤と話している間に後ろに回り込んだ近衛が、星野を両手で持ち上げる。

無闇に高いので、自然、星野の足は地面を離れて宙空に行く。

足をばたつかせたところで地面に下ろすと、近衛のスネを蹴って宮澤の後ろに行く。

「私に勝とうなんて百万年早いよあ」

「流石、星野さん。おみごと」

「えへへ」

嬉しそうに頭をかく星野に、やっぱり嫌悪感を抱けない宮澤。

それから、星野が帰ってくるのを待つグループに目を向けた。

その中にはいつだったか宮澤にビンタをしたやつもいるが、何故だか星野と一緒にいるだけで憎めなくなる。

星野はこのままついてくる気なのか、離れようとしなない。

「戻らなくていいの。みんな待つてるよ」

「ん、今日で最後だから」

え、と宮澤と近衛が同時に言おうとした時、ふいに突風が吹いた。それから、ぐいと誰かが二人を引っ張る。

風がやみ、二人が目を開けると、そこには白い薔薇の装飾が施さ

れた看板を持つ、いつもの店、Candy Storeがあった。

二人は戸惑ったが、不思議と吸い寄せられるように星野を発見した。

星野は二人に優しく一瞥した後、店内へと消える。

二人は一度顔を見合わせ、店内に入る。

と、そこには青年だけがいて、一枚の桃色の栞を持って立っていた。

「お待ちしていましたよ」

青年は優しく出迎えて、ポケットから一冊の本を取り出す。

そこには数十枚の栞が挟まっている。

青年はそこからまた桃色の栞を抜き取った。

「ではこちらに」

不思議にも、目の前に突如現れた扉に違和感はない。

二人は扉を開け中に入る。

そこは店の向こうではなく、大きなケーキが一つぽつんと置いてあるだけだった。

そのケーキはどこかで一回は必ず見たことのあるもの。

そう、ウェディングケーキだ。

まっしろなウェディングケーキ。

様々な形のお菓子達が散りばめられたウェディングケーキだ。

飴で精巧に作られた竜、冷たいアイスには埋まるように人型のクッキーが入り、バイクを象られたチョコプレートが乗り、二つのみたらし団子が赤い刀のようなもので寄り添うように固定され、プリンには甘い香りのさくらんぼが添えられて散りばめられている。

「凄い」

宮澤はやっとそれだけ言った。

「俺もこんなのが作りたい」

近衛は見惚れてそれだけが言えた。

「いつか、作れるようになれますよ」

大きなナイフと一緒に、青年は言う。

受け取ったナイフを二人で持ち、二人でウェディングケーキを上から切る。

すると、ウェディングは切られたところから本のように広がっていく。

中に書いてあるのは無数の文字、無数の羅列。

パタン。

青年は本を閉じた。

宮澤と近衛の姿はもうどこにもない。

青年は閉じた本を棚にしまう。

棚にはいくつもの本が所狭しと置かれていて、そのどれにもいくつもの栞が差し挟まれている。

「おっと、戻すのを忘れていました」

青年は戻したばかりの本を抜き取り、桃色の栞を差し戻してからまたしまう。

棚には二十三冊の本がある。

よく見ると箱になっていて、中に七つの本が詰まっているのもあったり、中身が途中で途切れているものもある。

青年は満足気に棚を眺め、それから棚にCLOSEDと掛けた。

そしてようやく役目を終えたばかりに、棚の前に置かれた椅子に座った青年はもう動かない。

青年の前には扉がある。

その向こう側には、老若男女、合わせて二十三人が立って、それぞれが青年に対して労いの言葉をかけていた。

最後に、青年の容姿が似通った女性が、扉を閉める。

扉には、大きく分かりやすい字で、CandyStoreと書か

れている。

それから二十三人は少しお茶でもしようかと、手頃な茶屋を目指して歩き出すのだった。

カラン。

世界は閉じる。

そこに、The Endの文字が美味しそうな色で浮かんでくるのだった。

ケーキ（後書き）

ご来店まことにありがとうございます。

さて、桜庭さん主催のcandystore、一週間と余日を遅れて完走できたこと嬉しく思います。

ここでは、少しネタバレでもしようかと思えます。

まず、みなさんおわかりかと思いますが、不思議なお店candystore、これは企画のcandystoreのさらに回覧板というスペースになっています。

次に空からの声、この声のある部分が企画のcandystoreそのもののスペース。

最後にそれすら包み込んだ場所としてThe Endが浮かんだ空間、これなるうです。

まあこれらは軽く意識しただけなので、置いていて。

本番はここから。

近衛、これは書き手としての回覧板です。

宮澤、逆に読み手としての回覧板です。

栞、これは感想を表しています。

星野さんはどうなったかを見れば、どこから登場したか分かるはず。老若男女の人達、これは企画としてのcandystoreにしか出ていない、つまり参加者各位を意識しました。

ネタバレとしてはこの程度でしょうか。

とくに盛り込んだ要素もなく、近衛と宮澤のイチヤイチャが楽しかった（笑）

また、どこかの企画や小説でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8025r/>

お菓子はアマイモノ

2011年8月17日03時10分発行